

審査員 選考所感



工藤安代

NPO 法人 ART&SOCIETY 研究センター代表理事

第3回目となる今回は、図らずもソーシャリー・エンゲイジド・アートの実践を再考する選考会となったと思う。SEA の実践において重要なファクターとは何か？— 現実社会に変化を及ぼすアクションか？芸術実践としての審美的クオリティか？現代における喫緊な社会問題への取り組みか？— 結果として採択されたものは、日本の社会問題のみならず世界規模で解決すべき課題にエンゲイジメントし、忘却や軽視の所為を問い、新たな形で課題を顕在化しようとする姿勢に貫かれたプロジェクトだと言えるだろう。

国内申請者に関しては、2割強が芸術祭の傘下のプロジェクトであったことが際立つ傾向だった。海外からの申請者は多国籍な顔ぶれとなり、SEA への国際的な関心の高さを感じさせたが、同時に日本におけるプロジェクトの実施には高いハードルがあり、特定の場や人びととの関係性が強く求められる芸術実践の難しさが浮かび上がった。今後は日本側の支援体制をどこまで準備するか検討する重要性を感じた。



窪田研二

インディペンデント・キュレーター

今回ソーシャリー・エンゲイジド・アート助成に応募されたプロジェクトには、高齢化問題や環境問題、あるいは差別、貧困、表現の自由など、今の社会がアクチュアルに抱える問題に対峙しようとしている案件が多かったのは歓迎すべき傾向だと感じた。しかしその一方で、斬新なアイデアや、突破力のある企画が乏しく、選考過程は困難を伴った。そのような中でブレイカープロジェクトは、経済格差による貧困やホームレスの問題に対峙し、これまで地道に活動を続けてきた実績と、今回提示された新たな試みが実を結ぶ可

能性が評価され助成対象のメインに選出された。そして昨年のあいちトリエンナーレにおいて、表現の自由をめぐる象徴的な作品の一つをベースに企画された『The Clothesline』は、声なき声を可視化する意欲的なプロジェクトであり、アーティストではない有志が集まって企画されている点でも可能性を感じた。

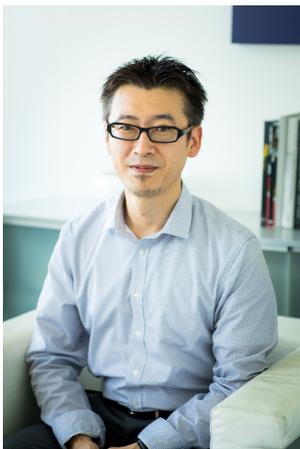


Photo: Mikuriya Shinichiro

近藤健一  
森美術館キュレーター

今回初めて審査に加わせていただいたが、企画コンセプトや内容がかなり細かく具体的に記入されている申請書が多く、申請者の熱意や本気具合を感じることができた。助成金の全額をすべて与えるにふさわしいと思われるほどに抜きこんでた1つの企画というのはなかったため、複数の企画を採択するに至った。コンセプト的に興味を引かれるが企画の実現性が低いように感じられるもの、逆に内容が新鮮さに欠けつつも確実に実現できると思われるもの、この2つのどちらを採択すべきか迷ったが、最終的には、地に足が付いた形で社会への介入をおこないつつ、美術としてのクオリティも保ち、実現性が高いと思われるブレーカープロジェクトの企画に、高額を助成することになった、と言っていると思う。



高嶺格  
美術家／秋田公立美術大学准教授

海外からの応募が前回から倍に増えたのはよかったが、リサーチ不足のもの・具現性のないものが多い。「日本で開催する」という条件は海外勢にとって最大の難関だと思うが、その条件を不利としないためには地理を超えたなんらかのアイデアが求められると感じた。対して大賞のブレーカープロジェクトは、日本のローカルを熟知した上での長年継続して

きたプロジェクトである。「表現」よりも、関わった社会の「変化」に第一義を置いてきた姿勢が、社会の中になんらかの変革をもたらす表現という本企画の意義に合致する。「これまで」と「これから」を通した活動という観点で大賞を選んだ。



Photo: Yurika Kawano

相馬千秋  
NPO 法人芸術公社代表理事  
アートプロデューサー

社会の分断は至るところにあり、またそれが時に暴力的な形で露呈するようになった今日の社会において、芸術が社会に関与するとはどういうことなのか。ソーシャリー・エンゲイジド・アートとは、芸術のジャンルやカテゴリーではなく、芸術と社会を切り結ぶ実践の探求であり、自己・対象ともに変革を促すための芸術的態度であるならば、その方法論もまた多様かつ大胆に発明され、新たに提案されるべきものではないか。そのような観点から審査にあたったが、全体的に既存のプロジェクトや作品をSEAと位置づけ直して申請しているものが多く、日本におけるSEAの新たなモデルになるような野心的な申請が少なかつた印象は拭えない。今後、実践の成果があらたな発明に繋がる回路が生み出されることに期待したい。



毛利嘉孝  
東京藝術大学大学院  
国際芸術創造研究科教授

今回選出されたブレーカープロジェクトは、もう10年以上にわたって大阪という地域に密着しながら独自の芸術活動を展開してきた、いわば日本型ソーシャリー・エンゲイジド・アート（SEA）のパイオニア的な存在である。また今回の企画の中心であるアーティスト、きむらとしろうじんじんは、「野点」という独特のアプローチでコミュニティとアートを結びつける活動で知られている。

SEA の支援助成事業も今回で3年目。今回は、SEA という欧米の現代美術の概念が、そう呼ばれる前から日本独自のユニークな展開があったことを示す貴重な例を提供するとともに、その射程の広がり、今後の可能性を考える契機となるだろう。それは、新しい現代美術の様式やジャンルというよりは、むしろ私たちが直面する社会とアートを取り巻く環境の大きな変化を示すひとつの「徴候」なのだ。